

令和5年度（2023年度）  
函館市西部地区再整備事業  
町会活性化プロジェクト

実施報告書

令和6年（2024年）3月

函館市  
都市建設部まちづくり景観課  
市民部市民・男女共同参画課

# 目次

1 町会活性化プロジェクトとは	P 1
2 これまでの取組	P 3
3 令和5年度取組	
(1) 青柳町会	P 6
(2) 弥生町会	P 11
4 まとめ	P 14

# 1 町会活性化プロジェクトとは

函館山麓に位置する西部地区は、異国情緒漂う歴史的な町並みや美しい景観などの魅力的な環境に、ここで生活する方々の日常の暮らしが相まって、市民のみならず多くの観光客が訪れる地区となっているが、近年、人口減少や高齢化等によりまちの活力は低下し、空家・空地が増加するなど、地区の魅力を失いかねない状況にある。

そのため、これらの課題解決に取り組みながら、将来にわたって持続可能な西部地区ならではの暮らしと風景を構築し、市内外の多様な方々の移住などにより定住人口の回復と交流人口の底上げを目的とする西部地区再整備事業を実施するため、本事業の基本的な考え方や方向性を定めた「函館市西部地区再整備事業基本方針」（以下「基本方針」という。）を令和元年（2019年）7月に策定した。

基本方針では、将来像として「西部地区ならではの『まちぐらし』の実現」を掲げており、当該将来像の実現に向けて事業を推進していくため、①共創のまちぐらし推進プロジェクト、②既存ストック活性化プロジェクト、③町会活性化プロジェクトの3つの重点プロジェクトを実施することとしている。

町会活性化プロジェクトは、人口減少や少子高齢化、町会加入率の低下などにより、町会の資金力や活動量が減少し、町会の存続にも大きな影響を与えていることから、市職員や学生等の新たな人材が町会に深く関わり、状況分析と方策の検討を町会と協働で行いながら、町会の活性化につなげる取組を進めることとしている。

## ○ 将来像

### 西部地区ならではの「まちぐらし」の実現

地区の歴史と文化を受け継ぎ、  
自分の日常をまちで活かしながら  
人とのつながりを育み、新しい暮らしを紡ぐ

### 「西部地区ならではのまちぐらしの姿」

- ・まちそのものを家として暮らす
- ・自分たちの暮らしを自分たちで創る
- ・人のつながりの中で暮らす
- ・ここにあった新しい暮らしを楽しむ

## ○ 重点プロジェクト

### 共創のまちぐらし推進プロジェクト

#### ● 目的

市民等と行政が連携して、共創による取組の検討・実施・検証を行う仕組みを構築する。

#### ● 事業内容

- まちぐらし事業の検討・実施・検証
- まちを学ぶ場の提供

ソフト事業  
(官民連携促進)

### 既存ストック活性化プロジェクト

#### ● 目的

空家・空地等の既存ストックの活用策を検討・実施し、良好な宅地の供給や生活利便施設の導入などを進める。

#### ● 事業内容

- 不動産データベースの構築
- 民有の低未利用不動産等の流動化促進
- 公有の低未利用不動産等の利活用

ハード事業  
(街区整備・建物改修)

### 町会活性化プロジェクト

#### ● 目的

市職員や学生等の新たな人材が町会に深く関わり、状況分析と方策の検討を町会と協働で行いながら、町会の活性化につなげる取組を進める。

#### ● 事業内容

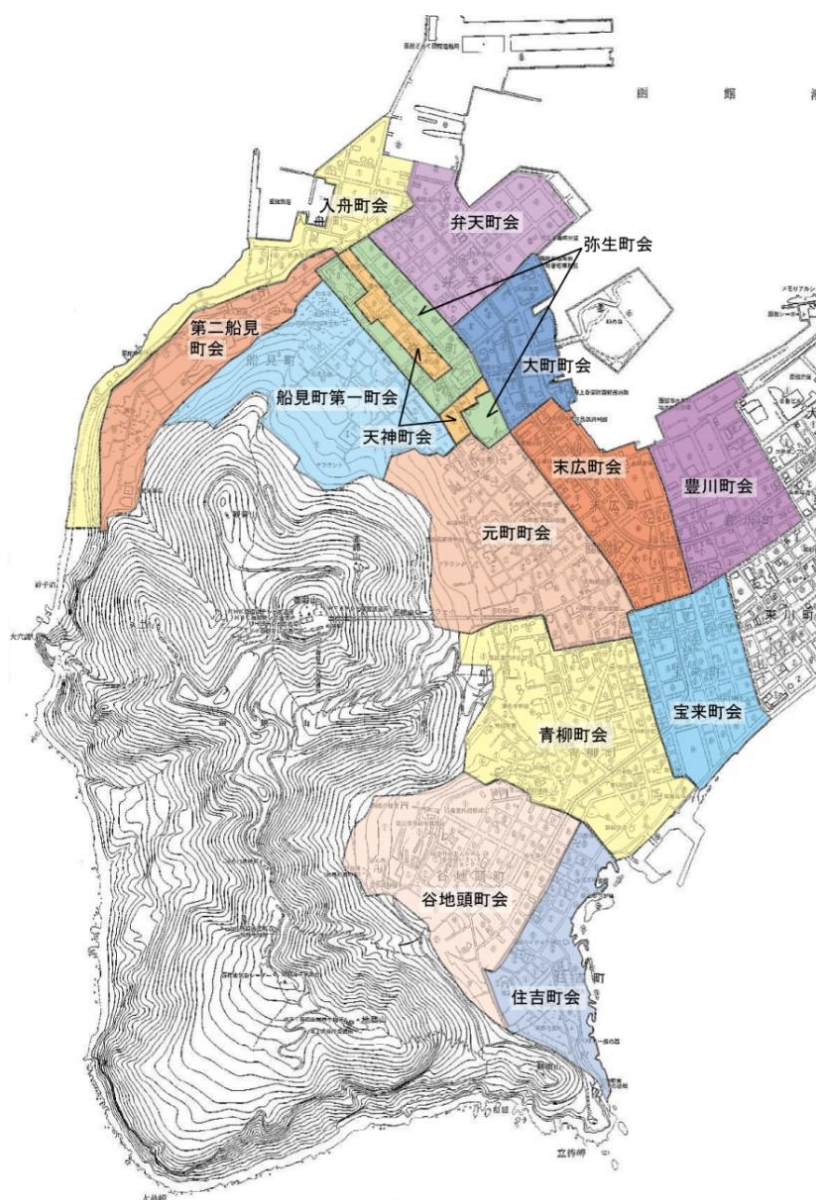
- 新たな人材との協働による町会活性化の推進

ソフト事業  
(町会活性化)

ソフト・ハード両面からの取り組み

なお、本プロジェクトの対象町会は、基本方針の対象地区にある14町会とする。

対象町会：入舟町会、船見町第一町会、第二船見町会、弥生町会、  
天神町会、弁天町会、大町町会、末広町会、元町町会、  
青柳町会、谷地頭町会、住吉町会、宝来町会、豊川町会  
合計 14町会



## 2 これまでの取組

### 令和元年度（2019年度）

モデル町会：元町町会

課題：役員および町会活動参加者が減少・高齢化していること

方策：将来の担い手育成のため町会活動に若い世代の参加を促すこと

実施内容：親子向け行事「もちづくり・豆まき大会」の開催

実施結果：予想を上回る参加があり、かつ、参加者の満足度も高かった。  
しかしながら、新型コロナウイルス感染症の影響により、事業の継続には至らなかった。



### 令和2年度（2020年度）～令和3年度（2021年度）

モデル町会：弁天町会

課題：担い手不足による若い世代向けの町会活動が実施できないこと

方策：若い世代が参加しやすい環境・仕組みをつくること

実施内容：子ども向け行事「しゅくだいくらぶ（勉強会）」および  
「スマイルくらぶ（遊びの場）」の定期開催

実施結果：町会に関わる新たな人材として、函館「荘」プロジェクトとの協働により実施した。新型コロナウイルス感染症の影響による休止があったものの、多くの参加があり、かつ、参加者の満足度も高かった。

しかしながら、運営を担う函館「荘」プロジェクトのメンバー（大学生）が多忙により運営を担うことが難しくなりつつあることから、今後の運営について検討が必要となった。



## 課題検証

町会活性化プロジェクトは、市職員や学生等の新たな人材が町会に深く関わり、状況分析と方策の検討を町会と協働で行いながら、町会の活性化につなげる取組を進めることとしているが、次のとおり課題があった。

- ① 市職員や学生等（新たな人材）の関わりがなくなると、活動の継続が困難となる。
- ② 新たな人材が主体になってしまい、地域住民の関わりが希薄である。

このことから、町会活性化の取組がモデル町会として選定されている期間中のみで終わってしまう懸念があるため、今後においては、町会単独でも持続可能な活動のあり方や持続的に町会活動に関わる人材の発掘を検討することとした。

そこで、次年度は、弁天町会において、新たな人材として北海道教育大学函館校（地域プロジェクト）にも協力いただき、子ども向け行事の開催などの方策を継続実施するほか、これまでのモデル町会とは特性の異なる青柳町会および弥生町会を新たにモデル町会として選定し、市職員が既存の町会活動に参加することにより、活発に活動している両町会の状況分析を行い、既存の町会活動の見直しなど必要な方策を検討することとした。



## 令和4年度（2022年度）

モデル町会①：弁天町会

実施内容：前年度に引き続き子ども向け行事「スマイルくらぶ」を開催

実施結果：子どもや大学生など地域の若い世代が町会活動に参加する機会の創出が図られたものの、運営メンバーが多忙になり、令和4年度をもって終了することとなった。



## 令和4年度（2022年度）

### モデル町会②：青柳町会

特 性：役員の平均年齢が若く、各役員に得意分野（イベント開催ノウハウ、デザイン等）があることを活かし、SNSによる情報発信や移動販売の誘致など町会館の利用促進を図っているほか、バザーの開催など活発に活動している。

課 題：①仕事や子育ての都合で町会活動の担い手として参加できない役員が多い。

②町会館の解体を検討しているが、資金が不足している。

実 施 結 果：既存の町会活動への参加や、役員および地域住民との意見交換を通して、状況分析を行うことができたことから、次年度は必要な方策について検討する。



## 令和4年度（2022年度）

### モデル町会③：弥生町会

特 性：役員の平均年齢が若く、SNSによる情報発信や回覧板の見直し、新規行事の開催など活発に活動している。また、町会活動の担い手として参加できる役員が多いほか、在宅福祉委員会委員と兼務しているため、両活動の連携により効率的・効果的な運営ができる。

課 題：新規行事（納涼祭）の運営方法を模索している。

実 施 結 果：既存の町会活動への参加や、役員および地域住民との意見交換を通して、状況分析を行うことができたことから、次年度は必要な方策について検討する。



### 3 令和5年度（2023年度）の取組

令和4年度に引き続き、モデル町会として、青柳町会および弥生町会を選定し、持続可能な町会運営・活動の方策を定め、具体的な取組を実施することとした。

#### (1) 青柳町会

令和4～5年度にかけて、青柳町会の状況分析を行い、方策を定め、具体的な取組を実施した結果は次のとおりである。（具体的な取組はP7～参照）

##### 【強み】

- ・ 役員の平均年齢が若く、役員それぞれに得意分野がある（不動産、イベント開催ノウハウ、デザイン…など）

##### 【弱み（課題）】

- ・ 仕事や子育ての都合で町会活動に参加できない役員が多い
- ・ 町会館の解体経費積立てが急務（町会運営・活動経費に充てられる経費が少ない）



##### 【課題解決のための方策】

- ① 持続可能な担い手の確保
- ② 収入の増加（資金獲得）に向けた取組



##### 【実施内容（取組）】

資金調達のために実施しているバザーにおいて、次のとおり試行した。

- ① 子どもが担い手として参加できる仕組みづくり（ボランティア等の活用など）
- ② 集客増加のための広報支援および他団体との連携



## ○バザー

青柳町会では、令和3年度に役員の大半が交代したことを契機に、多世代が集い楽しめる行事としてバザーを開催しており、売上金を町会館の解体経費積立てに充てている。

バザーは、町会員のほか町内外を問わず広く衣類・家電等の品物を募集し、これらを安価な価格で販売することから、経費を掛けずに売上が確保できるメリットがある一方、品物の受入れや仕分け、陳列、販売、後片付け、売れ残り商品の廃棄など運営の負担が大きく、また、仕事や子育ての都合で運営に参加できない役員が多いことが課題であった。

バザー来場者（売上）の増加に向けた令和4年度までの取組としては、町会員向けの回覧板での周知に加え、SNSや新聞報道により町会員以外へも広く情報発信しているほか、移動販売の誘致・同時開催などが挙げられるが、さらなる取組が必要であった。

そこで、令和5年度上半期バザー（6月開催）では、将来の町会運営を担う若い世代の参加を促すため、子どもや保護者向けコンテンツを強化するとともに、試行的に役員の子どもが担い手として参加したほか、さらなる来場者の増加を目指し、市の広報ツールを活用した。

### 【方策① 持続可能な担い手の確保】

#### 狙い①：若い世代の参加を促し、将来の担い手育成につなげる

「たこ焼きビンゴコーナー（子ども向け）」や「もみほぐしコーナー（保護者向け）」を新たに設け、買い物以外にも楽しむことができるよう工夫した。

#### 狙い②：子どもが担い手として参加できる運営方法の試行

担い手として役員の子どもが参加し、子ども向けコーナーの接客や後片付けなどに従事した。

みんなでつながろう！  
青柳町会  
バザー  
2023年 6.11(土) 10:00~15:00  
いいものたくさん見つかるかも。  
青柳町会へレッツ・ゴー！  
場所：青柳町会館  
バザーご協力のお届け



↑たこ焼きビンゴコーナーの様子  
(役員の子どもが接客を担当)

←子どもの興味・関心を喚起するチラシデザイン

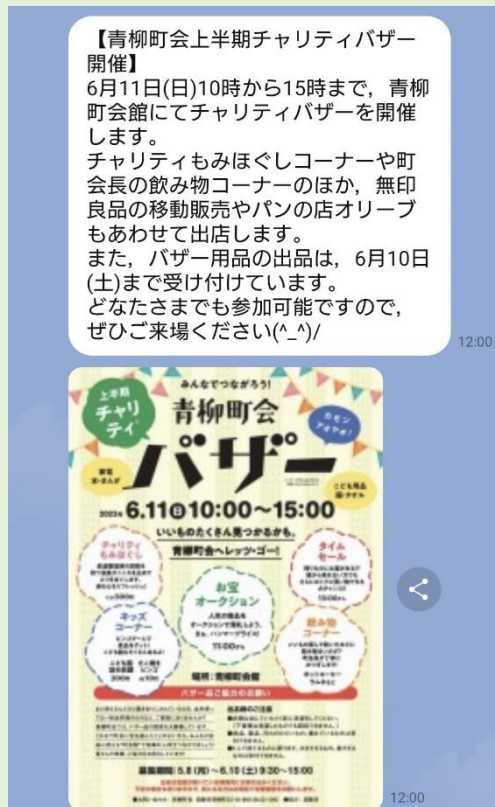
【方策② 収入の増加（資金獲得）に向けた取組】

狙い：来場者（バザー売上）の増加

青柳町会SNSのフォロワー以外にも広く周知するため、函館市公式SNSによる情報発信を行った。



↑ 函館市公式 X（旧 Twitter）による発信



↑ 函館市公式 LINE による発信

当日は、親子連れのほか若い世代をはじめ大勢の来場があり、役員の子どもによる接客も好評であったことに加え、後片付けにおいても大きく貢献し、役員の負担軽減につながった。

秋冬バザー（11月開催）では、引き続き、これらの取組を実施するとともに、新たな取組として、児童ボランティアの活用や役員の子どもによる販売コーナーを設置するほか、デジタル体験会を同時開催することで、さらなる効果促進を目指した。

## 【方策① 持続可能な担い手の確保】

### 狙い①：子どもが担い手として参加できる仕組みづくり

青柳ネット学校運営協議会の協力により、青柳小学校、弥生小学校およびあさひ小学校に対しボランティア募集を行ったところ、青柳小学校から延べ10名の児童に参加いただき、準備や品物の陳列、POP制作、接客および後片付けに従事した。

### 狙い②：子どもが主体的に参加できる運営方法の試行

役員の子どもが製作したアクセサリーを自ら販売するコーナーを設けた。



かたこ焼きピンゴコーナーの様子  
(ボランティア児童が接客を担当)

子どもたちの興味・関心を喚起するチラシデザイン



役員の子どもによる販売の様子



ボランティア児童による接客の様子

## 【方策② 収入の増加（資金獲得）に向けた取組】

### 狙い：来場者の増加および来場者を飽きさせない取組

市と包括連携協定を締結している TOPPAN 株式会社主催のデジタル体験会をバザー会場内にて開催し、高齢者ICT支援アプリやスポーツトレーニングシステムなど、多世代が楽しむことができる体験コーナーを設けた。



↑体験会の様子

←体験会のチラシ

当日は、親子連れのほか若い世代をはじめ大勢の来場があり、上半期バザーと比較して売上が増加した。また、ボランティア児童のみならず、保護者も自発的に後片付けに従事したことにより、役員の負担軽減に大きく貢献した。

### ＜役員や参加者の感想＞

- ボランティア児童の活躍がかなり大きかった。バザー運営の完成形を感じました！（役員）
- 小学生が意欲的に運営に従事していたことが印象的で、バザーが学びと多世代交流の場になったと感じるので、町会の役割として意義があると思う。（役員）
- 町会活動に初めて参加したが、いろいろな人と話せて楽しかった。（ボランティア児童）
- 町会館が広くてびっくりした。（ボランティア児童）
- 子どもが一生懸命に接客してくれるので、つい購入してしまった。久しぶりに子どもと話せて楽しかった。（来場者）

## (2) 弥生町会

令和4～5年度にかけて、弥生町会の状況分析を行い、方策を定め、具体的な取組を実施した結果は次のとおりである。（具体的な取組はP 12～参照）

### 【強み】

- ・ 役員の平均年齢が若く、団結力がある
- ・ 町会運営・活動に参加できる役員が多い
- ・ 町会役員と在宅福祉委員会委員の兼務が多く、両活動の連携が可能である

### 【弱み（課題）】

- ・ 町会活動の拡大に伴い、実施方法を模索している  
（納涼祭：実施に必要な物品の確保、道路占用許可など）



### 【課題解決のための方策】

持続可能な町会活動の運営



### 【実施内容（取組）】

納涼祭において次の①および②を試行するとともに、今後の町会運営に活かすため③を実施した。

- ① 地域の小学校などから物品を借用する仕組みづくり
- ② 道路占用許可など必要な手続きの整理
- ③ 北海道函館西高等学校との連携の検討

## ○納涼祭

弥生町会では、令和4年度に役員が大幅に交代したことを契機に、町会活動の見直しを行い、「人が集まる町会」を目指して、高齢者向けの茶話会や敬老祝賀会、子ども向けの七夕祭りやクリスマス会など、ターゲットを明確にしながらか積極的に活動している。

中でも、多世代をターゲットとする納涼祭（8月開催）は、焼鳥やかき氷、野菜、駄菓子などの販売を行う祭りであるが、町会員や地域住民のみならず、町外からも多くの来場があり、町会活性化に大きく貢献している町会活動である。

現在の役員は平均年齢が若く、町会活動を行う体制が整っているものの、将来を見据え、新たな担い手育成も積極的に行っており、役員の子どもや単身独居世帯の若者が担い手として参加していることが特徴として挙げられる。

しかしながら、新規行事であることから、会場の確保（拡大）や実施に当たり必要な備品を役員の私物等で賄っているなど、実施方法を模索している状況であった。

そこで、開催2年目となる令和5年度は、道路占用許可により会場を拡大するとともに、近隣小学校からテントを借用するなど必要な備品を地域内で調達することにより、事業の拡大と役員が交代しても持続可能な町会活動の運営に取り組んだ。

### 【方策① 持続可能な町会活動の運営】

#### 狙い①：道路占用許可による会場確保（拡大）

道路管理者と協議し、書類作成や減免申請など道路占用許可に必要な手続きを整理した。

#### 狙い②：役員が交代しても必要な備品を調達する仕組みづくり

弥生小学校など近隣からテントや机、椅子を調達することにより、熱中症予防や飲食スペース等の拡大を図った。



↑納涼祭の様子

当日は、気温が高く、日差しが強かったにもかかわらず、道路に設置したテント内で調理や販売を行ったことにより、熱中症予防に寄与したほか、飲食スペースの拡大により、高齢者や親子連れがゆっくりと食事を楽しんでいた。

### <役員や来場者の感想>

- ・ 去年は炎天下の中で焼鳥を焼いたので熱中症になったが、今年はテントのおかげで熱中症にならずに済んだ。(役員)
- ・ 道路を広く使用することにより、町会が販売するコーナーに加え、コーヒーやお花など、地域の店舗出店も実現できた。今後も、地域と協力しながら活動していきたい。(役員)
- ・ 座るところがたくさんあるので良かった。(来場者)
- ・ 小学校など地域との連携が良いと思った。(来場者)

### ○北海道函館西高等学校との連携

北海道函館西高等学校（以下「西高」という。）では、総合的な探究の時間において、生徒が自らテーマを設定し、地域と関わりながら精力的に活動しているところであるが、地域の課題解決をテーマに活動している生徒から、地域住民のニーズなどをヒアリングしたいとの要望があった。

そこで、持続可能な町会活動の運営を目指している弥生町会との連携を検討するため、茶話会（12月開催）にて参加者（高齢者）や役員に対し、西高の生徒が町会や地域住民のためにできることをヒアリングした。

ヒアリングの結果は次のとおりである。

- ① 除雪や入浴など日々の困り事はあるものの、西高の生徒に支援を依頼したいという高齢者はいなかった。
- ② 高齢者は若い世代との交流を望んでいる。
- ② 町会館までの移動が困難であるため、茶話会に参加できない高齢者がいる。
- ④ 茶話会は、役員の都合で毎月第1土曜日に開催しているが、平日のほうが参加しやすい高齢者がいる。
- ⑤ 学童保育所のように、子どもが町会館に通う機能があれば良い。

参加した西高の生徒からは、自分たちが卒業しても持続的に町会や地域住民に関わる仕組みづくりを検討したいとの意見があったことから、引き続き、弥生町会に相談しながら検討することとなった。



茶話会参加者からヒアリングする様子



役員からヒアリングする様子

## 4 まとめ

令和4年度（2022年度）から令和5年度（2023年度）までの2年間にわたり、役員交代を契機に活発に活動している青柳町会および弥生町会において、既存の町会活動への参加や役員・参加者との対話を通して状況分析を行い、課題解決のための方策を検討し、取組を進めた。

両町会に共通していることは、役員自らが、持続可能な町会運営・活動を目指して、知恵と実行力を発揮し、取り組んでいることである。

青柳町会におけるボランティアの活用や他の団体との連携、また、弥生町会における地域内で物品を調達（借用）する仕組みづくりについては、他の町会でも大いに参考になり得る事例である。

両町会の取組を通して、町会が持続可能であるためには、既存の町会運営・活動に固執することなく、担い手の負担軽減や経費縮減など、常に見直しを図る必要があると感じた。

同じ西部地区でも町会によって特性は異なり、活性化のための方策も三者三様であることから、今後においても、モデル町会の抱える課題など状況を把握したうえで、モデル町会の期間終了後も継続して取り組むことができることを前提に、町会が必要とする方策の実現のために、町会活性化プロジェクトを進めてまいりたい。